

民俗学の視点から土木を考える ～ 妖怪伝承にみる土木技術者の姿～

京都大学大学院工学研究科・都市社会工学専攻
助教 中尾聡史

土木改名論(1987年)

藤田龍之, わが国および中国における「土木」の語義の歴史の変遷に関する研究, 土木学会論文集, No.458, pp.147-156, 1993.

「一般の人々の「土木」という言葉から受ける印象はあまり良いものではないらしい。これは「どぼく」という濁音が続く発音からくる感じと、「土」という文字から連想する汚い、暗い、感覚が強いからと思われるが、いずれにしても、不当に悪い評価を受けている。このことについて、土木を専門とする人の中にも、これらの意見に同調する者も多く、なお一層「土木」の印象を悪いものになっている。

このような傾向に対して、土木学会では昭和62年9月に「土木改名論を考える」という研究討論会がもたれ、その反響も大きく、活発な討論がなされたが「土木」に代わる他の言葉を見出すような結論は得られなかった。

この改名論は、これまでも数回起っているが、その歴史は古く、土木学会が会誌を創刊した大正四年四月、第一巻・第二号に早くも「土木」に代わる言葉についての評論が出されて、以後この事に対して種々の意見が報告されている。」

プロフィール

1988年 大阪府岸和田市生まれ泉大津市育ち

2007年 大阪府立三国丘高校卒業

2008年 京都大学工学部地球工学科 入学

2011年4月 藤井聡研究室 配属

2018年3月 京都大学大学院 工学研究科 都市社会工学専攻
博士(工学) 取得

博士論文

「日本における土木を巡る心意現象に関する歴史民俗研究」
森栗茂一先生(民俗学)から指導

2018年4月～ 京都大学 レジリエンス実践ユニット 特任助教

2019年4月～ 京都大学大学院 工学研究科 都市社会工学専攻
山田忠史(交通情報工学)研究室 助教



土木を巡る世相(土木改名論の変遷)

・1987年 「土木改名論を考える」研究討論会

学者:「土木という言葉に対する一般のイメージが悪いこと」
「イメージの悪さから優秀な若者がこの分野に進学しないこと」

建設業界:「土木作業員という言葉にまつわる印象や利権がらみの体質をマスコミで採り上げることから、現場の仕事においても土木のイメージの悪さに困惑しており、ヘルメットをかぶっているところに来合わせた母親が「勉強しないとあんな風になるのよ」と子供にさとしていた」

「現場服を着て現場に立っている私のそばを、小さな子どもを連れてお母さんが通りかかって、「勉強しないとああいうことになるのよ」と言っているんですよ。本当に。(中略)現場服を着て現場に立っていると、そういうことは時々あるんだという話は先輩方からも聞いていましたが、自分自身がそれを経験するとはまさか思っていませんでした。」
藤井聡(2014)『築土構木の思想』、大石久和の発言

⇒「今のわれわれがなし得ることは、土木工学の内容と体質を変え授業内容を更新し広報活動によってイメージ改善を図ること」といった意見で締めくくられている。

土木を巡る世相(土木改名論の変遷)

- 1915年 佐藤四朗、『土木』是非、土木学会誌、Vol.1、No.2、pp.653-656。
「土木ナル語ヲ使用セルヤ之ヲ工事或ハ建築ノ意味ニ用ユルヨリモ寧ロ之ヲ醜悪又ハ汚穢ナル形容詞トシテ使用スルコト多キニ似タリ」
→土木という言葉は、醜悪や汚穢の意味を含んでいる
- 1950年 松尾春雄 土木技術者の進むべき道、土木学会誌、Vol.35、No.10、pp.1-5。
「土木は身なりを飾らないこと、粗野のこと」
「土建屋がパンパンと同列に論ぜられるような例がよくある。」
- 1959年 真田秀行、土木と云う語、土木学会誌、Vol.44、No.6、pp.27-28。
「土木と云う語は如何にも蛮的で、土方を聯想して、下品であるから、他に適當の名称なきやとはと麼々聞く所である」

1976年のロッキード事件を契機とした公共事業の利権問題が顕在化する以前から、土木に対する否定的な意識が日本において存在していた可能性がある

5

民俗学とは(柳田国男の民俗学)

経世済民の学・・・

「我々の学問は結局世の為人の為でなくてはならない。即ち人間生活の未来を幸福に導くための現在の知識であり、現代の不思議を疑ってみて、それを解決させるために過去の知識を必要とするのである」

(柳田国男『民間伝承論』郷土生活の研究法、1935)

民俗資料の三分類

- ①眼に映じ写真に撮られる「有形文化」
 - ②耳ある限りは誰にでも収集し会得しうる「言語芸術」
 - ③最も微妙な心意感覚に訴えて初めて理解できる「心意現象」
- 「心意現象」を発掘することを民俗学の第一の目的とした。

「この部(心意現象)の調査ばかりは結局外国人には出来ないで、当人たちが自ら自己を客観し得る時が来るまで待つ他はない」

(柳田国男『民間伝承論』)

7

民俗学とは(柳田国男の民俗学)

- ・民俗学は、近代化の中で農村が疲弊し、長年蓄積されてきた伝統文化が廃れつつあった昭和初期、柳田国男(1875~1962)によって提唱された。
- ・庶民の生活意識、生活経験から、日本の総体的な歴史・文化を捉えることの重要性を柳田は主張した。

柳田国男作品集より

「郷土研究の第一義は、手短かに言ふならば平民の過去を知ることである。社会現前の実生活に横はる疑問で、是まで色々試みて未だ積き得たりと思われぬものを、此方面の知識によつて、もしや或程度までは理解することが出来はしないかといふ、全く新しい一つの試みである。平民の今までに通つてきた路を知るといふことは我々平民から言へば自ら知ることであり、即ち反省である。」

(柳田国男『民間伝承論』郷土生活の研究法、1935)

6

民俗学とは(常民とは)

「常民」

柳田の造語であり、中世末から近世にかけて平地部に定着し、江戸時代には日本人の人口の約7割を占めていたとされる「ごく普通の百姓」のことを指す

・「常民」の持つ民俗体系に着目すれば、総体的な日本文化も捉えられると考え、1930年代頃から「常民」に焦点をあてるようになった

・「常民」に焦点をあてることで、柳田民俗学は、大きな成果を収めた。

8

民俗学とは(非常民の民俗学)

一方で、1980年頃から、柳田民俗学への批判が高まる。

民俗学者・宮田登『民俗宗教論の課題』(1977)

「初めから除外する部分があった上で、常民は存在するのであり、こうした常民を主流とした日本民俗学は、当初から一つの限界をもっていた」

⇒宗教者や漂泊民といった「非常民」を除外した
日本文化論ではないか???

「非常民」とは。。。

常民とは異なる生活様式や慣習、技術を持つ漂泊民。
例えば、木地師、サンカ、芸能者、民間宗教者。

9

民俗学・歴史学における土木従事者に関する既往研究

三浦圭一(1984)は、

1936年に土木学会から提出された『明治以前日本土木史』の論調が、中世・近世における土木工事が、「農民による農業労働の延長としてとらえることができる」という見解に基づいていることに疑問を呈し、
中世における土木工事を専業とする社会集団の存在を指摘する。
「中世の土木と職人集団」, 永原慶二・山口啓二編『講座 日本技術の社会史 土木』, 日本評論社, 1984.

市川秀之(1991)は、

- ・近世尾張で活躍した土木技術者である「黒鍬」が、下級の陰陽師の系譜にあることをつきとめる。
- ・土地の神様の怒りを鎮める地鎮の呪術を持つ陰陽師が、その呪術的能力から土木工事に関係しており、結果として土木技術を持ち合わせていた可能性を示唆する。
- ・この土木技術が「黒鍬」へ継承されたことを、断片的な史料と伝承から見抜く。

「日本の土木の歴史を考える時、呪術性と差別の問題は、
かかすことのできない重要な要素として強く認識されるべきであろう」
オブリ衆の伝承を追って—近世の池構築造技術者集団—, 近畿民俗, Vol. 125, pp. 1-15, 1991.

11

民俗学とは(非常民の民俗学)

ただし、初期の柳田民俗学では、
『遠野物語(1909)』『山の人生(1926)』に代表される「山人」研究
『所謂特殊部落の種類(1913)』『毛坊主考(1914)』に代表される
「被差別民」研究などの「非常民」研究が存在した。

この『毛坊主考』において、柳田は、
特殊な土木技術を持つ人々を「非常民」
として捉えている。

しかし、, , 1930年頃から柳田の関心は「常民」へと向かう。
民俗学では「常民」研究が主流になる。

1980年頃から、常民研究を主流とした柳田民俗学を批判が出てくるとともに、非常民に関する研究がなされるようになる。
土木技術者に関する研究もなされるようになる。

10

民俗学・歴史学における土木従事者に関する既往研究

三鬼清一郎(1987)は、

- ・中世において、大地に対して人為的変更を加える土木行為は、大地の神の怒りをもたらしものと観念されていたこと
- ・それ故に、人間と自然の間に立ち、神の怒りを鎮める呪術を駆使することのできる、呪術者である陰陽師や声聞師が必要とされたことを指摘している

三鬼清一郎:「曹娥と作事—大地と人間—」, 朝尾直弘編『生活感覚と社会』, pp. 233-258, 1987.

土公神(どこうじん・つちぎみのかみ)

平安期ごろから、陰陽道において、土中には
「土公神」という土を司る神がいると考えられており、
深さ三尺(約1m)以上の土を掘削することは
「犯土(ぼんど)」とされ、忌むべき行為とされた。
深澤隆:『狭衣物語』の土忌, 倉田実編『王朝人の婚姻と信仰』, 森話社, 2010.

⇒埋井戸の遺構に、呪符が付けられた竹筒が井戸中央に立てられていたことから、河原者には、井戸掘りの専門技術者としての役割だけではなく、呪術者としての役割も期待されていたことが推測されている。

三浦圭一:「技術と信仰」, 三浦圭一編『技術の社会史1 古代・中世の技術と社会』, 有斐社, 1982.
林幸ゆみ:「中世民衆社会における被差別民と造園職能の発展過程」, 日本造園学会誌, Vol. 58, No. 5, pp. 17-20, 1995.

12

民話にみる土木作業員

児童文学作家の松谷みよ子が、

1974年に岸和田市の久米田池で以下のような民話を地元の住民から聞き取っている。

「行基は久米田池を掘るにあたって、摂津の毘陽池から持ってきた人形に息を吹きかけた。するとたちまち人形は人間になり、池の造営に大きな働きをした。その人形は土で作ってあった、といわれていて、肋骨が一本足りないといわれている。」

そして、聞き取りを行った際の話として、次のようなエピソードを紹介している。

「土の人形を作ったというのは、つまりその、人手不足だったんですかと愚かな質問をした。するとその人は……其の時私は携帯用のテープレコーダーをまわしながら聞いていたのだが、突然、そのテープを止めてください、といった。そして、声をひそめていったのである。いや、いまも、土の人形の子孫がひとかたまり、住んでいます、と、私は呆然として、その人が目で指すあたりを眺め、もう一度その人を見つめ、そして、雷に打たれたようにその言葉の意味を悟った。それは差別ではありませんか、今、この時代になってもそういうふうに分けてかかるなんて……いや、そんなことはありませんよ。今はまったくそんなことはありません。じゃあ、結婚についてもそのようなことはないか。いやそれは……。」

土木事業に土人形が関わったという民話が語り継がれる中で、土人形の子孫と呼ばれ一種の差別を受けてきた人びとが堤防の下に暮らしていた……

若尾五雄

土木技術者が河童と呼ばれていることをいち早く指摘した

若尾五雄

- ・岸和田市の産婦人科医
- ・1950年代から非農業文化研究に着手していた異端の民俗学者
- ・徹底したフィールドワークを行い、地域に残る伝承の背後にある地理的・歴史的事実を追い求めた



若尾五雄「黄金と百足」より

「それぞれの伝承の底流にはいろいろな思いやそれぞれの背景を持つ、つまり史上の事実の一部が織り込まれて伝えられて来ているのが伝説だと思わねばなりません」

文化人類学、小松和彦

定住民である常民にとって、彼らの世界の外部に住み、様々な機会を通じて接触する**非常民は、異人視される立場にある**

⇒**非常民の存在が妖怪にまつわる民話を創り出す一つの大きな基盤になっている**

折口信夫『河童の話』

あまんしやぐめ(小鬼)が、入江を横切る橋を一夜で架けようと、3000体の藁人形を作って働かせたが、工事を終えると、藁人形を、川へと放した。すると、藁人形は、河童になった。

折口信夫『折口信夫全集 第三巻』、中央公論社、1966。

⇒**大規模な土木工事のために作られて、川に捨てられた人形のなれのはてが河童であるという伝承が全国に分布している**

国立歴史民俗博物館所蔵河童想像模型

⇒この河童は、非常民である土木技術者ではないかと指摘。

小松和彦『異人論 民俗社会の心性』筑摩書房、1995

14

鬼伝説

桃太郎伝説

桃の中から生まれた桃太郎が、犬・猿・雉を連れて、鬼を退治し、宝物を奪う

国立歴史民俗博物館所蔵『大江山酒香童子絵巻』の鬼

- ・若尾五雄(1995)は、鬼退治の伝説が伝承されている地域を踏査し、これらの地域に、タタラ跡や鉱山跡があることをつきとめる。⇒鉱脈を探し、採掘、精製する鉱山技術を持った**鉱山師(非常民)**が鬼と呼ばれていた可能性があることを指摘する。

つまり、鬼退治の民話は、**鉱山に住む鉱山師を退治し、鉱物(金、銀など)を奪取する話**

16

鉱山技術と土木技術(宮本常一の指摘)

宮本常一の出身地である周防大島(山口県久賀町)の棚田の石垣を築き上げた土木技術者を調査する中で、この付近に「**鑄物師原**」という地名があることや、**梶田(鍛冶田)**や**梶谷(鍛冶谷)**などの姓を持つ家が多く存在することを発見

「砂鉄精錬には砂鉄を掘る者、たたらで働く鑄物師、鍛冶屋で働く鍛冶、炭焼き、荷持ちなど多くの技術者や労働者を必要とするが、砂鉄堀の仲間は職業から土木工事にたくみで、砂鉄を掘らないときは開拓事業にやとわれて方々をわたり歩いたもので、普通に黒鍛師といわれた。砂鉄に限らず、金、銀、銅など掘る者もみな開田にしたがったものである。とくに鉱山へ働かなくなると、開田や石垣積みにやとわれて、そういう仕事にのみ専念するようになっていく。久賀の人びともそのためであろうが石垣積みと土木仕事にたくみで、早くから西日本各地を放浪して歩いたのであった。」

宮本常一:『民衆の知恵を訪ねて』, 未来社, 1981.

大分県豊後高田市 熊野摩崖仏

「この田染の里に毛むくじらの赤鬼がやってきて、人間を食べるというのです。それを聞いた熊野の権現さまは、何かよい方法はないかと考えました。そして、いち夜のうちに百の石段をこしらえたら許してやろうと約束したのです。権現さまは、とうていできるはずはないと思っていたのですが、なんと赤鬼は、ひよいひよいと石を担いで、あつという間に**五十段こしらえました**。その早いこと早いこと、みるみるうちに九十九段築いたのでした。おどろいた権現さまは、百段目の石を担いだ赤鬼の足が山かげに見えたとき、「コケッコウ」とにわたりの鳴き声をまねしたのでした。赤鬼は、「負けたあ」と最後の石を担いだまま逃げ出していったそうです。」

現地案内板より

⇒石段が現に存在しているのであるから、石段を築いた土木技術者が存在していたはずであり、伝説上、この土木技術者が鬼と呼ばれている。

同様の話は、大分県別府市八幡電門神社、福岡県豊前市国玉神社、宮崎県都城市東霧島神社、秋田県男鹿市赤神社にもある



中尾撮影

鬼伝説

鉱山技術と土木技術(五郎兵衛用水を事例に)

五郎兵衛用水とは・・・

江戸時代初期に長野県浅香村に開墾された新田をつたう約20キロメートルに及ぶ用水路のこと。この間には、三つの山を貫いていて、その中の一つ片倉山では、324メートルの隧道が掘られている。山の東西から掘り進め、山の真真中で二つ目のトンネルが直結している。

川元祥一(1991)は、

五郎兵衛用水の隧道の土木技術を調査し、**鉱山師・石工の持つ鉱山技術がこの隧道の土木技術に転用された**可能性を示唆している。

また、鉱山師が卑賤視されていた可能性を示唆している。

小葉田(1968)は、

「築堤治水の土木工事は信玄時代に注目すべきものであったが、これらの土木技術は鉱山技術と深い関係がある」と金堀集団と土木集団との近似性を主張。

**鬼と呼ばれた鉱山師の技術が、
隧道掘削の土木技術に転用されていた
⇒土木技術者が鬼と呼ばれていた可能性が考えられる**

石段作りの土木技術者のルーツ

- ▶ 国東半島には、摩崖仏をはじめとして石塔、板碑、五輪塔などの優れた石造品を造立した石工が古くから活躍していたことから、石工が石段を築いた可能性も十分に考えられる。
- ▶ ただし、石段作りを行った土木技術者のルーツが、鉱山師なのか、石工なのか、黒鍛師なのか、修験者なのか、それともこれらの複合なのか、漠として分からない。。。(調査中)
- ▶ また、青森県弘前市鬼沢には、鬼が作ったと言われる農業用水路(鬼神堰)が現存している。近くの岩木山には、古代製鉄技術者が居住していた。鬼沢地区では、節分の豆まきをしない。



中尾撮影

宮本常一(1907~1981)

- ▶ 日本の民俗学者
- ▶ 『忘れられた日本人』で有名。
- ▶ 日本の津々浦々を歩き、人々の「実生活」や「生きざま」について「聞き書き」を行った。
- ▶ 旅した日数は4000日、歩いた距離は、16万キロ(地球4周分に相当)
- ▶ 宮本を終生支え続けた渋沢敬三(元日銀総裁)は、

周防大島文化交流センターより

「日本列島の白地図の上に、
宮本くんの足跡を赤インクで印していったら、
日本列島は真っ赤になる」と述べている

21

「土木に対するケガレ意識」の考察

網野善彦:『日本の歴史をよみなおす(全)』。

「河原者は井戸を掘ったり、大きな石や樹木を動かすなどの、一種の土木にたずさわっています。これもさきほどからのべてきたケガレの問題と大いにかかわりがあることで、当時の人びとは自然に大きな変更を加えることにきわめて慎重であり、しかもこれに対しては、ある種の畏怖感を抱いていたと思われる。ですから例えば井戸を掘るについてはさまざまなマジカルな儀礼があったようで、陰陽師などがかわりを持っていたと見られますし、大木や大きな石を動かすことについても同様だったと思われる。河原者もおそらくかなり早くから、そうした仕事にかかわりをもっていと推定されます。」

網野善彦:『日本の歴史をよみなおす(全)』、ちくま学芸文庫、2005。 23

技術者軽視

民俗学者・宮本常一 「技術者軽視」

熊本県山都町(旧矢部町)通商橋山都町観光ナビより

「土木建築の工事がなされても、讃えられるのはその工事を直接担当した大工や石工ではなく、その工事を計画し出資した人であった。私はかつて熊本県の石橋を調べて歩いたことがあった。熊本県の山間部には目を見晴らせるようなすばらしい石橋がいくつとなくある。それが深い溪谷の上にかかっている。それらの石橋をかけるために苦心して資金を集め、計画した人の名は今もよく伝えられまた人にも知られている。(中略)しかしその直接橋の工事をを行った石工たちの名を記憶している人は少ない。』『生業の歴史』(1993) 22

「土木に対するケガレ意識」の考察

「ケガレ」とは、「人間と自然のそれなりに均衡のとれた状態に欠損が生じたり、均衡が崩れたりしたとき、それによって人間社会の内部におこる畏れ、不安と結びついたもの」

・例えば、人の死は人間と自然の均衡に欠損を生じさせるため、**死穢**と呼ばれ、穢とされた。

・死だけでなく、「**巨石や巨木を動かし、自然に大きな人為的変更を加えること**」や「**大地に変化を加えること**」もまた、「ケガレ」と同様に捉えられていた

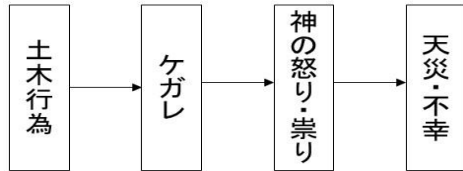
・「ケガレ」に対する**神の怒り**は穢れを発生させた**当事者の死**や**天災**などの形をとって神罰として表出する

・牛馬の死骸処理も、大地に変更を加える土木作業も、「ケガレ」に関わることであり、どちらも河原者の仕事であった

自然に大きな人為的変更を加える土木行為もまた、人間と自然の均衡を乱すために「ケガレ」を生み、神の怒りを招くものであるから、それを鎮めることのできる呪術を持った河原者が土木に携わっていた

網野善彦:『日本の歴史をよみなおす(全)』、ちくま学芸文庫、2005。 24

「土木に対するケガレ意識」の考察



波平恵美子(2009)

「日本人の信仰を理解する上で、ケガレの観念についての考察を深めることが重要であること理由は、何よりも、**ケガレが人間の不幸の説明として用いられるからである**」

「具体的には、思いがけない人の死や、頻繁な仕事の失敗や、病人の頻発などの原因として「何かケガレかかっているのではないか」と考えて、ケガレの発生源を捜すという信仰活動として示される。」

25

「土木に対するケガレ意識」の考察

1995年5月14日の毎日新聞

「阪神・淡路大震災について私は学問的、科学的にはわからないが、神様が怒ったと言うとそれを信じます。淡路島北端に野島断層があります。明石海峡大橋の工事でドンドンと野島断層の頭を打ったので海の神を怒らせたと信じます」

「海の神、山の神を怒らせたので、明石大橋工事は阪神・淡路地域が完全復旧するまで中止すべきです」

阪神淡路大震災という地震を天罰と考え、その原因を、地震と科学的に因果関係のない土木工事に求めている。

「土木に対するケガレ意識」が、無意識の慣習として潜在しており、こうした言説となって表面に表れてきていることが考えられる

27

「土木に対するケガレ意識」の考察

野坂昭如 1995年1月27日朝日新聞

「(前略)東京に較べ、神戸の、焼跡からの復興は、おくれていた。拍車のかかったのが、昭和三十一年、国体開催以後。今度は、猛烈な勢いで街は変貌、南北に流れる川の川床は、崩した山の土を、埋め立てのため海へ運ぶ、ダンプカーの通路となった。訪れるたび、あらためて迷子になりそうな感じで、足が遠のいた。夕暮れ刻、西から阪急電車で近づき、武庫川を過ぎたあたりで、シルエットとなって浮かぶ六甲山系の姿だけが昔のまま。夕暮れ刻(とき)、西から阪急電車で近づき、武庫川を過ぎたあたりで、シルエットとなって浮かぶ六甲山系の姿だけが昔のまま。摩耶埠頭には、さほど違和感を抱かなかったが、**ポートアイランドで、いやな予感がした。ぼくも、神戸には地震がないと信じていた。大震災を思ったわけじゃない。ただ、いかにもやり過ぎである。具体的に何がどうというわけじゃないが、「天罰」みたいなもの考えたのだ。他処者がとやかくいうことじゃないと思いつつ、胸のうちに、こんなことをしていると、今にえらいことが起る、ハラハラしていた。(後略)**」

26

「土木に対するケガレ意識」の考察

千と千尋の神隠し (2001)

映画の舞台である湯屋に、高度経済成長期における過度な開発によって傷つけられ、疲れ果てた神々が訪れる

もののけ姫 (1997)

山を削って鉄をつくる製鉄集団、すなわち非常民と、それによって森が破壊されたことに対して怒る動物神が「たたり神」となって争う世界が描かれている。

宮崎駿

(2009年10月1日毎日新聞夕刊「朝浦埋め立て・築橋問題:「ボニョの海が残る」原告側全面勝訴、喜びはじける」)

「開発でけりがつく時代は終わった。公共事業で劇的に何かが変わるといふ幻想や錯覚はやめた方がいい」

28

「土木に対するケガレ意識」の考察

羽田空港の大鳥居

(朝日新聞1994年5月18日朝刊「ボツンと「伝説」の大鳥居
東京・羽田空港」)

「昨年九月に新ターミナルビルが開業した東京・羽田空港で、旧ターミナルの解体工事が進んでいる。重機械がごう音を上げるその前に、鳥居がひとつ、取り残されたように立っている。戦前からこの地にあった、穴守稲荷神社の「一の大鳥居」だ。終戦直後、空港を接収した米軍は、大規模な拡張工事に着手。神社を強制退去させ、鳥居も何度か取り壊そうとしたが、そのたびに作業事故が起きたり、工事関係者が病気になったり……。「お稲荷様のたたりだ」と恐れられ、残されることになった、と伝えられる。今回の解体工事で手付かずに残された鳥居だが、空港の沖合展開計画に伴い、すぐ近くに新滑走路ができるため、近く「立ち退き」を余儀なくされそうだ。」

手塚治虫「新・聊齋志異 お常」より

公共事業のせいで借金まみれ

土木批判に関する既往研究

・田中(2013; 2014; 2015)

大手新聞社5社の報道について分析を行い、ここ20年の間に、公共事業に対するネガティブな新聞報道が急増し、**公共事業に対する批判的な風潮が形成されつつある**ことを指摘

例えば、

「かつての自民政権は道路や空港を各地につくり、「土建国家」と言われた。**公共事業による景気対策を大盤振る舞い**した結果、今では国の財政は約700兆円の借金の山だ。」
(2012年12月02日朝日新聞朝刊)

「建設会社が政治家や官僚に賄賂を贈る汚職も相次いだ。極めつきは、財政の悪化だ。**公共事業を増やしたせい**などで、政府の借金残高は、90年度末の166兆円から、12年度末には約700兆円に達する」

(2013年1月24日朝日新聞「アベノミクスって、なに？」)

「土木に対するケガレ意識」の考察

羽田空港の大鳥居

宮田登(1999)

「人間の理性はそう簡単に崇りというものを受けつけないですけども、**自分自身秘かに抱えている不安とか不幸が積み重なると、それと因果関係がある**と考えるのが人間の習性であります」

「無意識の慣習については明確な存在理由を明らかにできないままで、その**あいまいな部分が崇りという一つの文化現象**となって残る」

土木行為が天災や不幸を招くと考える「土木に対するケガレ意識」が、現代においても無意識の慣習となっており、その存在が明らかにされずにいたことが、土木批判という社会現象を形作る重要な原因の一つなのではないか

まとめ

①土木改名論の変遷に着目し、日本において土木行為や土木従事者に対する「汚い」といった否定的意識が、現代まで継承されていること

②民俗学や歴史学の既往研究を整理し、

中世においては、非人や坂の者、河原者と呼ばれた非常民が、そして、近世においては、河原者などを源流とする黒鍛が、土木技術者として土木事業に携わっていた歴史が存在すること

また、大地に対して人為的変更を加える土木行為は土地の神の怒りをもたらすものと観念されていたがために、土木事業に際して、土木技術だけでなく地鎮の呪術も持つ非常民が必要とされた歴史が存在すること

③土木従事者は、異人視され、河童や鬼といった人間ではない妖怪として常民から差別視されていたという民俗的事実があること

④「土木に対するケガレ意識」が、上記の歴史的事実・民俗的事実と整合する形で、日本人の潜在意識の中に存在していること